

氏 名 瀬川 拓郎

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大乙第 154 号

学位授与の日付 平成 18 年 3 月 24 日

学位授与の要件 学位規則第 6 条第 2 項該当

学位論文題目 擦文文化からアイヌ文化における交易適応の研究

論文審査委員	主査	教授	西本 豊弘
		教授	春成 秀樹
		教授	広瀬 和雄
		教授	新谷 尚紀
		助教授	佐藤 孝雄（慶應義塾大学）

## 論文内容の要旨

瀬川拓郎氏の博士学位審査論文『擦文文化からアイヌ文化における交易適応の研究』の構成は以下の通りである。

序論 狩猟採集社会における共生と持続のシステム

第Ⅰ編 擦文文化の異文化交流と自然利用

第1章 擦文文化の流通体制と周辺文化との関係

第2章 擦文文化の自然利用

第Ⅱ編 アイヌ文化の自然利用

第1章 上川アイヌの社会と交易適応としてのサケ漁

第2章 流通手段としての丸木舟からみたアイヌ地域社会の形成

終論 アイヌ・エコシステムの成立

瀬川氏の論文は、近年特に注目されてきた北海道の古代から近世にかけての本州との交易の問題に着目したものである。これは擦文文化の遺跡の発掘調査が増加し、擦分文化の情報が増加したこと、及び本州北部の古代から近世の遺跡の内容が明らかになったことと関連しており、北海道の擦文文化の人々が自発的に本州からの鉄器や農耕などの新しい文化を受け入れたのではないかという発想に基づいている。

この考え方を論証するために、まず第Ⅰ編では、擦文文化の内容を考古学的な事例から説明した。そして、この時代に北海道の北辺にサハリンから南下して居住していたオホーツク文化人の生活内容も紹介した。ここではオホーツク文化と擦文文化の土器の融合の問題を通じてオホーツク文化人と擦文文化人の交易などの関連を論じた。一方、本州との関係については本州の鉄器や陶磁器、穀物栽培などの受容とその対価としてのサケの本州への供給を焦点として擦文文化人と本州人との関係を論じた。その結果、擦文社会がサケ漁の魚場の占有へと変化し、さらに流通システムの確立に至り、擦文文化社会が変質して近世アイヌ社会へと移っていったと考えた。

第Ⅱ編では、上川アイヌの生活を長年の聞き取り調査と文献資料から考察した。ここでは、サケ漁の具体的な方法や道具の検討だけではなく、アイヌの社会組織についても考察し、サケ漁の社会的重要性を指摘した。

終論では、このサケ漁を中心とした生業システムおよび社会構造の完成をアイヌ・エコシステムの成立と定義して、アイヌ社会におけるアイヌ・エコシステムの機能と役割、意義について論じた。これは従来の縄文エコシステムつまり物々交換のみを目的とした続縄文文化以前の交易システムとは異なり、土地の占有や人の支配・非支配の関係を含む社会システムとしてのアイヌ・エコシステムの新たな考え方を論じたものである。

この新しいアイヌ・エコシステムを提唱した瀬川氏の視点は、従来、北海道の人々は本州の文化を一方的に受け入れてきたという受動的なものではなく、北海道側からの自発的な行動によって新しいシステムを自ら作り出したという自立性を強調したものである。その点で独創性の高い論文と言える。

## 論文の審査結果の要旨

瀬川拓郎氏の博士学位審査論文『擦文文化からアイヌ文化における交易適応の研究』の審査の結果を報告する。瀬川拓郎氏の論文の構成は以下の通りである。

序論 狩猟採集社会における共生と持続のシステム

第Ⅰ編 擦文文化の異文化交流と自然利用

第1章 擦文文化の流通体制と周辺文化との関係

第2章 擦文文化の自然利用

第Ⅱ編 アイヌ文化の自然利用

第1章 上川アイヌの社会と交易適応としてのサケ漁

第2章 流通手段としての丸木舟からみたアイヌ地域社会の形成

終論 アイヌ・エコシステムの成立

序論は、アイヌ文化の規定・本州文化とアイヌ文化との関係・アイヌ文化のエコシステムなど、本論文の目的・趣旨を要約したものである。

第Ⅰ編は、北海道の紀元後7世紀頃から12世紀頃までの擦文土器文化における人々の生活を、擦文文化人と本州人との交易活動とサケ利用に焦点を当てて議論した。この時期には、北海道の北部から東部のオホーツク海岸には、サハリンから南下したオホーツク文化人が居住していた。擦文文化人はオホーツク文化人と交易を行っていたが、次第に擦文文化人はオホーツク文化人を同化・吸収していった。一方、擦文文化人と本州人との関係は、擦文文化人がサケを用いた交易を活発に行うようになったことから、本州への従属的關係から自立するようになったと考える。

第Ⅱ編は、旭川を中心とする上川アイヌの生活について、特にサケ漁を中心に説明した。そして、サケ漁とサケを交易品として本州社会と積極的に交易するアイヌ・エコシステムが確立したとする。

終論は、縄文文化から続縄文文化までの縄文エコシステムと擦文文化以降のサケを中心としたアイヌ・エコシステムとの相違を述べ、アイヌ文化の成立はアイヌ・エコシステムの成立であると説いた。

一般に、擦文文化は、擦文土器が本州の土師器の影響を受けて製作されただけでなく、住居の形態・かまどの導入・鉄器や穀類の出土例などから見て、本州の古代文化の強い影響を受けて成立したものとされている。アイヌ文化は、この擦文文化期を経て次のアイヌ文化期となるので、擦文文化に迎えることが出来ると言われてきた。その場合、クマ送り儀礼など多くの面で見られるアイヌ文化の独自性はどのように維持されたのかが問題となる。その点について、瀬川氏は、近年、特に注目されている本州との交易の問題に着目し、擦文文化人の側からのサケを用いた本州との交易活動が、大きな役割を果たしたと考えたのである。それは、擦文文化人が単に本州文化を受容しただけではなく、北道側から本州に対して、鉄器やその他の文物の移入に積極的な働きかけが行われたのではないかと考えた。従来、北海道に居住する人々は本州の文化を一方的に受け入れてきたといわれてきたが、北海道側からの自発的な交易活動もあったことを主張するものである。これは擦文文化の資料が増加したこと及び本州北部の古代から近世の遺跡の内容が明らかになりつつあることと関連しているが、古代から近世にかけての北方社会を考える上で重要な視点と言える。

これらの内容から、この論文は博士の学位に相当する論文と認められる。